



ユネスコ会員綱領

心の中に平和の守りを固めよう
 すべての人間の尊厳を重んじよう
 教育・科学・文化の発展に努めよう
 民族間の疑惑と不信を除こう
 世界を友愛と信頼のきずなで結ぼう

3人の青年



「すな」を合言葉に結集した組織である。一昨年二回にわたってその会議に招かれ出席した。一回目はボルゴグラード(ソ連)での委員会、二回目はボローニヤ(伊)での総会で、それぞれスピーチに立ち、広島からの訴え”を行なった。広島への呼びかけた「核兵器廃絶のための都市連帯」にも、この連盟の多く

ヨーロッパに「戦争受難都市平和都市連盟」という組織がある。第一次大戦、スペイン内乱、第二次大戦と、戦争の絶え間がなかった今世紀前半に、致命的な被害を受け、多くの人命を失なった都市が二度と戦争を起こさ

ない日本語で、こちらがびつくりしたが、これは父親が旅行社の東京支社長だった関係で渋谷の日本人小学校に四年間在学したからで、むろん日本文字もすらすらと書ける。アウディさんはそれほど日本語はうまくないが、卒業論文は吉行淳之介を書くというから、不勉強な私などより、ずっと現代日本文学にく

のメンバー都市が加わっている。それはともかく、この二回にわたった旅は、いずれも「ひとり旅」で、現地でそれぞれ通訳のお世話になった。モスクワボルゴグラードではモスクワ大学東洋学研究所のブラジンスキー君という二十五歳の青年、ボローニヤではベニス大学日本文学専攻のアウディさんという二十三歳の女子学生。いずれも日本留学の経験があり、日本語が堪能な若者で、語学に弱い私は随分助けられた。特にブラジンスキー君は、日本人よりも美しい日本語で、こちらがびつ

りた。この二人の青年との出会いによって、不案内な海外の旅がどれほど楽しくなったか、はかり知れない。青年といえは、もう一人、昨年ユネスコ日中交流で中国へ出かけたとき、西安―蘭州―敦煌とずっと付き添ってくれた李春生君も忘れられない一人である。日本留学の経験もないのに、日本語の理解力は抜群、肩肘を張らない付き合いの出来る親切さが身に沁みる好青年。その李君がこんど広島大学教育センターの留学生に合格、四月から来るというのは何よりのこと。すでに山崎克洋、亀井章君ら広島ユネスコ協会のメンバーが受入れに奔走してくれているが、協会としてもその広島生活が豊かになるよう出来るだけ協力してあげたい。研究テーマは「大

学教育制度」というから、帰国後は中国近代化の一翼を担う人である。

この三人の青年をみていて、これからの世界の若い世代は文字通り国際化され、国境や社会制度の違いを越えて、人間同士の心の通い合う豊かな世界になるような気がする。日本という他国の文化に精通し、日本人の考え方と同化することによってみずからの学問の領域をひろめるとともに、それが二国間ひいては多国間の平和交流に役立つであろうことを十二分に心得、それを理想としている点が共通しており、そういう理想を追及する姿勢が実にさわやかで明るいからである。かえりみて、日本の若者の側にこういう国際化に向けての理念が果たしてあるのだろうかと思わざるを得ない。私の周辺では広島大からスエーデンに留学、平和の問題にも懸命に取組んでいる児玉克哉君の例を知るだけである。

先ごろのユネスコ国内委員会で中村秀子日ユ協連理事が「ユネスコの理解は社会教育の分野だけではなく、学校教育の分野にも広げなければならない」と発言したが、まことにその通りで、今の学校教育に欠如しているのは真の意味の「国際人」を育てるという視点が欠落してしまっているのではないかと思うのである。

若者にほしい国際化への理念

他国理解が平和交流の基盤

広島ユネスコ協会会長 河村盛明

わしい。この二人の青年との出会いによって、不案内な海外の旅がどれほど楽しくなったか、はかり知れない。

先ごろのユネスコ国内委員会で中村秀子日ユ協連理事が「ユネスコの理解は社会教育の分野だけではなく、学校教育の分野にも広げなければならない」と発言したが、まことにその通りで、今の学校教育に欠如しているのは真の意味の「国際人」を育てるという視点が欠落してしまっているのではないかと思うのである。

ユネスコの将来は？

広島ユネスコ協会顧問

内海 巖

ユネスコは、アメリカ、イギリスの脱退により、危機に直面しているといわれます。強大国のエゴなのか、また、一国一票の制度によって決められるユネスコの決定制度に問題があるからなのか、様々な論議がされているところで、

国連におけるこうした動きは、直接、間接に、わが国におけるユネスコ運動にも影響を与えると思われませんが、さらには、われわれが直接関与している民間ユネスコ活動にも大きな影響力を及ぼすことが予想されます。そこで、ここでは、本広島ユネスコ協会顧問である内海巖氏（日本ユネスコ協会連盟副会長）に、こうした問題点、最近の動向を、特別寄稿の形で解説していただきましたので紹介します。

試練の中にあるユネスコ

米英の脱退が非常事態を

狂った予想

千葉果弘氏（ユネスコ教育担当事務次長補）はユネスコ勤務二十六年を迎え、ユネスコに勤務する日本人職員の最古参者である。十七年前に千葉氏がユネスコの将来に対して描いた自分のシナリオが、完全な修正を余儀なくされてしまったと、最近述べられたのを聞いて、歴史の流れの激しい展開を想わずにいられなかった。

理想に近い予想が、千葉氏の胸にあった。これを根底からくつがえしたのが、アメリカ・イギリスそしてシンガポールの脱退だというのが、千葉氏のなげきなのだ。

これからのユネスコ

そのための第一条件は、政治的決意（Political Will）である。加盟国のすべてに、ユネスコを通して教育・科学・文化・コミュニケーションの間での国際協力を実現しようとする意図がないかぎり、望ましい形のユネスコは成立しない。これには、日本が総会・執行委員会を通してくりかえし主張している、全ての国の合意が得られる事業計画を作製することが大切であり、対立や対決を助長するのではなく、協力を促進する作動を増さねばならない。

望ましい事業計画が打ち出された時は、去った国も復帰する可能性があり、ユネスコの普遍性も回復されることになろう。ユネスコはいま、その独自性と質の向上が問われており、二十一世紀に向けての新しいビジョンが求められている。そこで、今年度（一九八八）に開始される第三次中期事業計画目標（Medium Term Plan）と一九八八～八九年事業計画が最大の関心事となる。

望まれる新ビジョンと事業計画の樹立

一方、ユネスコの事務局の強化と質の向上も、ユネスコの将来にとって大きな課題である。（次ページへ）

一九五〇年代、西欧文化を土台とした知識人のサロンの第一期、一九六〇年から七〇年代前半までの、アジア・アフリカの新独立国の加盟による開発途上国の開発・発展を中心課題とした第二期、そして一九七〇年代後半からの第三期は、ムボール事務局長を迎え、先進国・途上国が対等の立場で、幅広い国際協力の時代、調和のとれた東西関係、南北関係及び南―南関係

マルティネラ リズムの危機
アメリカ・イギリスの脱退を機に、世界のジャーナリズムはあまりにも多様な諸問題をかかえこんだユネスコに対し、その力量不足を非難するむきが多かった。現在では、国連や国連の専門機関であるFAO（食糧農業機構）WHO（世界保健機構）までも攻撃にさらされてお

アメリカ・イギリスの脱退により、ユネスコは予算の三分の一と八百の職員の削減という非

い気持の表現として、アメリカ・イギリスの脱退が実現したとも考えられるが、それはまた、大国のエゴイズムの表明ともいえよう。

ユネスコ中期計画

一九八二年十二月、ユネスコ第四回特別総会は、一九八四―一九八九年中期計画を採択した。それは当時の加盟一六〇国の全員一致によるものであった。その背景には次のような認識があった。

世界が解決に迫られている諸問題は、まさしくユネスコが果さなければならぬ権限内の問題であり、ユネスコの権限内の問題とは、おそらく決定的に重要な変化が既に起こりつつある人間の活動領域全般に関する問題を意味するという認識である。元来、経済的・技術的問題、開発・環境・平和・安全・権利・基本的自由の問題は、教育・科学・文化・コミュニケーションというユネスコが担うべき四つの分野と切り離して論じることができず、しかもこれらの諸問題は相互に分離できない性格のものだという点である。

部は省略することを許されたい。

- 一、現在、個人や諸民族を等しく結びつけている共通の運動について更に認識を深めるために、現在の世界の諸問題についての継続的研究に寄与すること
- Ⅰ 世界の諸問題の考察と将来に向けての研究
- 二、(省略)
- 三、(省略)
- 四、人々の強い願望が一致する分野において、国際社会全体が現在必要と認めた変革や転換の促進を助けること。
- Ⅳ 開発のための原則と方法と活動の戦略

- Ⅱ 科学と技研と社会
- Ⅴ 諸民族間の真の理解を前提とし諸価値の再生を喚起し、奨励し、それによって平和と人権の運動を前進させること。
- Ⅵ 文化とその将来
- Ⅶ 偏見、不寛容、人種主義とアパルトヘイトの除去
- Ⅷ 平和、国際理解、人権と諸人民の権利
- Ⅷ 女性の地位

職員とで、ユネスコの独自性と質の向上を果たすためには、一九八八―一九八九年の事業計画を、この五大使命と十三のプログラムの提示と矛盾することなく処理できるかにかかっている。また、第三次中期計画(一九九〇―一九五五年)については、去る二月十六日に開催された第八十回日本ユネスコ国内委員会で「政治的に左右される事業はとりあげないこと、事業計画を重点的に集約すること」の方針が再確認されたことは、きわめて適切なことであったと考える。

ユネスコに關係した人々の中から新事務局長が生まれることが望ましいように思われる。全職員が得られる高邁な人格者でなければならぬことは、いうまでもない。

以上が、千葉氏が示された、ユネスコ新事務局長の望ましい人間像を私なりに要約したものである。

ユネスコは只今、試練のまっただ中にある。上述の諸条件をふまえた上で、これまでユネスコに關係した経験を豊かにもたれた知識人のなかから新事務局長が生まれることが期待されているといえよう。アジア地域から選ばれるといっても、日本人にこだわることはあるまい。

〔参考文献〕千葉果弘氏「ユネスコ―その軌跡と将来―」ユネスコ・アジア文化センター「ニュース」(一九八七・二・一五) 第四項参照

再建に力量ある新事務局長を

昨年五月、ムボー事務局長は、自らは三選を求めないと声明を発表し、ユネスコ執行委員会は、その英断をたたえた。次はアジア地域からといわれており、既に候補者の乱立がうわさされ、アジアのまとまりのなさが他地域から批判されているという。

ここで、千葉果弘氏の考えられている、新事務局長の望ましい人間像から、その要旨を利用させていただく。

まず、教育・科学・文化・コミュニケーションのどれかの面

で著名な人であり、二十一世紀に対するユネスコのビジョンを世界に有効に印象づけられるエネルギーで行動的な人であってほしい。すべての国に受け入れられる人ということは、ユネスコ再建のためには大切な条件であり、脱退した国々から復帰してもらい、ユネスコの普遍性を再び確立することの出来る人であってほしい。

一方、官僚化したユネスコ事務局を運営していくには、抜群の行政能力が必要とされる。新しいマネージメントに通じ、二十一世紀に向けてのユネスコの新機軸をだせる人、ユネスコの改革のために英断をとる勇氣のある人が必要である。

文化的背景の異なる人間集団の長となるためには、暖かい人間性を持っている人で、偏見をもたないで全ての職員を包容できる人であってほしい。

ユネスコも莫大な組織になり、複雑化した今日、ユネスコについての知識のない新人にとって、ユネスコの運営は至難な業で、



寛容の心に感動

中国の偉大な文学者である魯迅は、「世の中に昔から道があったわけではなく、多くの人が歩んで初めて道ができた」と言っている。

第二次世界大戦下の日中間には「侵略と戦争の道」しかなく、戦後の日中間の往来する道も全く閉ざされていた。長い間、米
国への追随外交
「広島市民平和友好訪中団」
(団長高橋昭博・一行九名)は

平和友好目的とした市民レベルの訪中団としては初めてのもので、「中国人民平和擁護軍縮協会(会長周培源元北京大学総長)」の招待により、昨年五月十八日の昼過ぎ、上海に第一歩を踏み出した。この訪中団は、中国と広島との間に、平和友好の「血」をそそぎ、「心」をかよわせる、ささやかな市民レベルの「平和友好の道」を探るのが目的であった。

上海、南京、重慶、北京の四都市を平和行脚して、中国の各界各層の指導的立場の方々や大学の教官・学生たちと交流した。私は、団長として、あるいは、被爆者として、それぞれの交流の場です、まず、中国に謝罪することから始め、そのあと、自身の被爆体験と平和についての考えを話した。

——大戦の中で、たとえ少年であったとはいえ、当時を生きた日本人の一人であったことはまぎれもない事実である。戦争に勝つためには、敵兵を一人でも多く殺すのが正しいことだと軍国教育で教えられ、それを信じて生きてきた私は、やはり罪を持った人間であったと、深く反省している。日本の中国侵略によって、貴国と人民のみならず、私たちは、「世界の指導者や

一辺倒であった日本の政治と、それを取り巻く国際政治が日中間の道を封じてしまっていた。日中国交回復の闘いは茨の道が続いた。心ある人びとのたゆまない努力が実り、日中友好の「小さな道」は、やがて「大きな道」へと切り開かれて行つた。戦時下において、また、戦後しばらくの間も、中国は「近くて遠い国」であったが、いままさに、文字どおり近いアジアの隣国となった。これから、ますますこの隣国中国とは真の平和友好の絆を強固にしていかなければならない。

非人道的な殺りく行為を繰り返す、むこうの人たちを大量に殺傷したことについては、日本人の一人として、心からおわびをする。——私は、大要、まず、このように謝罪したのである。これに対して、交流したの場においても、「あなた方日本人には、罪も責任もない。それどころか、広島原爆被爆者の方々には、戦争の大きな犠牲者である。中国の侵略は、日本の一部の軍国主義者が起こしたものである。過去よりも未来を見つめて、お互いに手を携えていこう」と、中国側の出席者は口々に言ってくれた。中国の方々の深くて温かい寛容の心に大きな感謝を覚えた。

私は、米国二回、ソ連一回、そして、ジュネーブとウィーンの国連機関を訪れ、被爆体験とヒロシマの心について語った経験を待つが、中国の場合は、他の国々に対して被爆体験を伝えるのとは、全く別の思いがあった。それは、日本人の加害者としての側面である。つまり、「原爆前史」を原爆被爆者も学習し、知らなければならぬのである。原爆投下は、いわば、日本の中国侵略の帰結であるとする歴史学者も少なくない。

青少年が広島に来て、直接被爆の実態に触れ、被爆の実相を確認してほしい」と、国の内外に訴え続けている。南京大虐殺受難同胞記念館を見学し、生存者の証言を聞き、重慶市長の少年時代の戦争体験に耳を傾けた時、やはり、中国の惨禍を本当に知るためには、中国を訪れ、直接日本軍隊の残虐行為の実状を、自分の目で見、耳で聞き、心で感じなければならぬと思った。過去の過ちを再び繰り返さないために、過去のできごとを決して忘れてはならない。過去を切り離した現在がないように、未来もまたあり得ない。一つの時代の体験を伝えることは至難であるかもしれない。しかし、その体験をつうじて結晶した思いは子々孫々に伝えていかなければならない。それが、過去を真に現在と未来の平和のために生かし、役立たせることになるものと、中国訪問を終え、改めて痛感した。



広島市民平和友好訪中

常任理事
高橋昭博

広島ユネスコ協会の高橋昭博氏、山崎克洋氏は、昨年、それぞれ広島市民平和友好訪中団、日中間ユネスコ交流団の一員として、中国を訪問されました。そこで、両氏に、訪中時の印象などを寄せていただきましたので、ご紹介いたします。



日中民間ユネスコ交流

常任理事 山崎 克洋

現代文化の見直し
せまる遺跡群

このたび、(財)日本ユネスコ協会連盟が主催する「日中民間ユネスコ交流計画」による日本ユネスコ代表団員として、去る昭和六十一年十月十日から十日間の中国を旅する機会を得た。この交流計画は、日本ユネスコ協会連盟と中国国際交流協会との間で、民間ユネスコ交流を実施し、両国相互の教育、科学文化の諸分野における連帯と民間ユネスコ組織の交流をしよう



楊貴妃ゆかりの華清池

とするもの。今回は、当広島ユネスコ協会の河村盛明会長を団長とする一行六名が訪問した。北京、西安、蘭州、敦煌などの各地の学校訪問、文化団体との交流などを通して、中国の人々と意見の交換や交流の促進を図ることを目的とした今回の中国旅行の印象の一部をご報告させていただきます。

北京では、国家中央教育委員会(日本の文部省にあたる)副主任、揚海波氏より、中国教育の現況を聞き、義務教育九年制の完全実施、衛生教育、家庭教育の充実が現在の重点目標にかげられていることを知る。北京第八中学校では、日本の課外活動のような形で行われているユネスコクラブの活動を視察。先生たちとの意見交換も延々三時間にわたる熱心な討議であったが、日本の教育制度、教授技術についての関心は高く、プラスになるものならなんでも吸収

しようという積極的な姿勢が印象的であった。また、この中学校の生徒たちの笑顔の美しかったことが忘れられない。夜は、連日、パーティの連続であったが、北京烤鸭店の北京ダックと東来順飯荘の蒙古産小羊の最も柔かいところを薄切りにしたしゃぶしゃぶの味は、中でも絶品であった。ビール、ぶどう酒、白酒、黄酒での乾杯でほろよい気嫌の毎夜であった。宿舎は、西苑ホテルであったが、近代設備を誇る二十五階建てのホテルで、香港華僑と中国との合併による経営であった。屋上には、デイスコもあって、ここが北京とはどうしても結びつかないほどの西欧風のナイトライフが連日くりひろげられていた。自由化の波は、相当に進んでいるようである。

次の都市は西安である。紀元前十一世紀ごろから、約二千年にわたり歴代王朝が都を定めた中国一の古都である。唐の時代には、シルクロードを通じてインド、東ローマなどと通商をもつ世界有数の国際都市であった。現在の西安は古都であると同時に、西部地域随一の工業都市でもある。ここでは、秦始皇帝をはじめ、玄宗皇帝と楊貴妃、僧玄奘、阿部仲麻呂などにちなむ史跡を訪ねることができた。華清池では楊貴妃ならぬメキシコ美人に出会い、話しかけるとなんでも有名な女優であったらしく、建築家の父親が自慢そうに教えてくれた。おかげで、団員からは国際交流魔というアダ名をちようだいするはめになっってしまった。西安の城壁は、明代に再建されたものだが、唐代からくれば、六分の一の規模でしかないらしい。古代中国の人たちに占領感覚がなかったのか、城を相手に引き渡すことが恥だったのか、それはわからないが、とにかく戦乱のたびに、城は焼き払われ、破壊されてしまったそうである。そのせいか、一見したかぎりでは唐時代の遺跡がどこにあるのかさっぱりわからない。現在は、明時代の城壁すら次々ととりこわされ、学校や住宅や工場にと生まれ変わっている。

そんなとき、「文化活動站」を碑林でみつけた。さしずめ、日本では公民館ということになるか。「だれも青少年を健全ですこやかに育てなければならぬ」というスローガンと同時に、「家庭教育学級の案内を見かけたときには、本當にうれしくなってしまった。」

第三の訪問地は、蘭州である。ここに来て、はじめて黄河を見た。黄河の水は黄色いものときめてかかっていた私の予想は、みごとにはずれ、澄んだ美しい水が流れていた。黄河をはさむ形で、北に白塔山、南に五泉山公園があり、眼下に黄河と蘭州市内を見おろす眺めは絶景であった。西へ向かうとそこはシルクロードである。山合いの街であるにもかかわらず、ここは、人口二百万の大工業都市でもある。ここでは、蘭州大学の訪問と甘肅省博物館の見学をした。黄河上流の古代文明を物語る出土品から明代に至る多くの文物を収蔵している博物館は興味深い。夜は黄河劇場で京劇を観賞。その衣裳とセリフまわし、テンポの早い舞台の動きは、ミュージカルに通ずる楽しさがあった。最後の訪問地は敦煌である。今回の旅のハイライトでもあったのだが、飛行機便の都合で日帰りという強行日程となってしまう。おかげで、莫高窟を心ゆくまで観賞できなかったのは残念であった。人間の可能性の偉大さを思い知らされると同時に、現代の文化がどこまで進んでいるのか、考えこまざるを得なかった。

中国ブロック・ユネスコ活動研究大会 基調講演「軍拡と軍縮」要旨

一九八六年度中国ブロック・ユネスコ活動研究会は、昨年十一月二十九日、三十日、広島市中区県民文化センターで開かれ、中国地方の各ユネスコ協会から多数の人が参加しました。

二日間の日程は、基調講演から始まり、次いで二つの分科会「国際理解と国際協力の推進」「国際平和のとりくみ」を軸に各地域での日常活動に基く報告と討論が進められました。

会の詳しい報告は別の機会に譲り、今号では当日の基調講演(要旨)を再録します。

最近の核軍拡をめぐる状況は深刻な状況にある。何が深刻ならしめるかと言えば、S D I (戦略防衛構想) 問題が大きい。だが、S D I だけを考へても深くは理解できないので、そこに至る米ソの核兵器の競争の跡をたどってみる。競争は絶えず行なわれているが、そこには一つの歴史的節目がある。節目はまた軍縮にとっても重要な時期である。核兵器競争のエスカレーター、その節目が抑えられれば、

軍備管理から軍備撤廃へ

山田 浩先生
広島大学 教授
平和科学センター

で相手の攻撃に備えて非脆(ぜい)弱化のための開発が進む。たとえば I C B M (大陸間弾道弾) を地下に潜らせ、あるいは分散させ、移動させる。70年代には量から質へ。多くの核弾頭が一機のミサイルに繰り込まれ、命中度を高める手段となる。これが80年代レーガン政権になると質的な軍拡競争が一層強まる。核兵器は単なる核弾頭ではなく、システム化され、コマンド(指揮)コントロール(管制)コミュニケーション(通信)の三つのCとI(軍事情報)の「C I」ネットワークというような複雑化、高度化が米ソ軍拡競争の重要テーマとなってきた。この事態は、一方では偶発戦の危険性もはらんでおり、深刻である。その延長線上にS D I があるわけである。

このような状況下では素朴な軍縮論は時代遅れとなった。今軍縮のための対策は極めて複雑になってきた。これまで人類が軍縮のための努力を図ってきた中で現在軍縮に関して、確認されていることがいくつかある。

まず、軍備管理ではダメだということ。軍備管理と軍縮は別のものであり、米ソ間の取り決めはすべて軍備管理であった。大気圏内の核実験禁止がそうであり、また戦略兵器制限交渉で締結された兵器の上限決定は、むしろ核兵器の存在を前提にして、つつ核兵器の質的競争に拍車をかける結果につながった。

ところで、軍縮といっても一度に核兵器が撤廃されるはずはない。そこで改善の策を考えなければならぬ。それには二つのタイプがある。

一つは核兵器を削減していくこと。この具体的措置の一つとして対兵力戦略という構想から対都市戦略に米ソとも切り換えられるという発想の転換も重要な糸になる。もう一つは、核兵器の不使用協定。だが、一挙には出来ないで、そこで第一不使用宣言。最初に使うことは互いにやめようということ。それもむつかしいだろうということ。それは、非核地帯。ある地帯には核は使わないというのとは一種の不使用であって、日本の非核三原則もこれに関係する。非核自治体もこの考え方につながっていく。

以上のような従来からの軍縮についての提案、構想らしきものは出尽くしていると言つてよい。要はそれらをいかにして実現にもっていくかだ。そして最近ではS D I の出現ということ、軍縮の柱としてS D I をいかにして封じ込めるかということになってきて軍縮交渉に多少の変化が出てきた。米国は核兵器の五〇パーセント削減を認めるようになり、ソ連は西欧の戦域核兵器の全面的な撤廃を認めてもいいところまできている。ただし、問題はS D I の研究開発はいいが、実験テストと実戦配備は封じ込められるというのがソ連の主張。米国は削減は認めるが、同時にS D I は野放しにすべきであるというのが立場。この点からすると、削減するということは現在の交渉の中心から外れてきているということに注目しなければならぬ。削減できるかどうかは、すべてS D I が封じ込められるかどうかにかかっている。それだけに困難がある。だからといって困難があるからいかんということになるのだろうか。「現実を認識する時は非観主義者でなければならぬが、理想を語るにおいては楽観主義者でありたい」というシュバイツァー博士のこゝろを常に思い出す。人類が築き上げた文明はそういう人間によって築かれてきたと思う。軍縮のむつかしさを認識すると同時に軍縮を実現するうえで楽観的でありたい。(報告 川井章常任理事)

子ども日曜学校 祇園公民館

この事業は、二十一世紀を担う子どもたちに、国際平和文化都市にふさわしい人になっていただくために、六年前から、広島大学の留学生などを招き、その国の歴史や文化、風土、人々の暮らしや考え、子どもたちの様子、とくに学校生活や遊び、歌などを紹介していただいております。

今回は、韓国、マレーシア、インドネシア(二回)、台湾について学習しました。受講する子どもたちは、小学校四年生から六年生までの三十人。日曜日の午前中、熱心にメモを取ったり、やつぎばやに質問をしたりして、学校の教室で見られない活気のある学習会です。「外国の人と直接話ができ、その国の様子がよくわかり、同じジャンケン遊びでも、マレーシアと、インドネシアでは、指のちがいがあつたりして、

大変面白い。また、子どもたちの歌う歌は、リズムがどことなく共通しているようだ。大きくなったら、ぜひ、学習した国々へ行ってみよう。」と目を輝かせて語ってくれます。

三月八日に実施した「台湾について」は、広島大学教育学部で学ぶ陳士昌さんが講師を務めました。

世界地図で位置を説明したのち、持参の地図で「面積は、三・六万平方キロで九州より小さい。気候は、亜熱帯で暖かく、台風も発生する。一番高い山は、玉山で、富士山より高い」と説明すると、子どもたち

は、いつせいに感嘆の声をあげます。さらに「車は、右側通行で、日本とは逆ですが、ハシで食事をする。学校教育は、日本と同じで、中学校までが義務教育」と説明が続きます。子どもたちは、「台湾には火山がありますか。オリンピックではどんな種目が強いですか。学校では何時から始まりますか。」などと活発に質問が飛び出します。

陳さんは、流暢な日本語で、ていねいに答えながら学習は続きます。最後に、子どもたちがよく歌っている台湾の歌「阿里山之歌」を教えてもらって、みんな

も合唱しました。メッセ・コンベンション・シティを目指す広島市、一九八九年アジアオリンピックを開催する広島市、そして、二十一世紀は、アジアの時代といわれています。

私たち日本人は、西欧諸国にあまりにも目を向け過ぎているのではないのでしょうか。アジア諸国は、高等学校の世界歴史の教科書でアジアに最もウェイトをかけております。アジアの一員であるわが国は、もっともつとアジア諸国を理解すべきであると思えます。(佐伯一幸 広島ユネスコ協会常任理事)

さて、フィリピン料理が手早くできあがりました。きょうは、みんなの仕込みが良かったのでしよう。先生を囲んで食事をします。「なかなかうまくできたね」「やはり日本の味と違うね。」と隣り同士で話し合いながら食べます。また、食事とともに、フィリピンの国について、先生が「私の国の人々は歌が好きで、性格的に明るいですよ」など、食事の感想、先生の国の紹介、お互いの国についての情報交換があり、楽しい国際交流のひとつを過ごしました。(藤井 孝行)

公民館のユネスコ活動

なるほど 世界の料理教室 吉島公民館

「こんにちはみなさん。きょうは、フィリピン料理を広島大学に留学しているゼナイダ・ベラスさんをお願いいたします。」なるほど世界の料理教室の代表者が、はじめの言葉を述べました。

きょうの参加人数は、いつもの二十五名です。(男性三名、女性二十二名) 会員の多くは料理好きとか国際交流に関心がある人々で、土曜日の夜にもかかわらず、主婦が多いのです。その大部分は、パートなどで働いているかたがたです。若いOLの人も五、六人はいます。男性は、中年の働きざかりの人たちです。

料理の作り方を先生がゆっくりと、言葉を確認ながら説明しはじめました。むつかしい日本語になると英語の説明がはいり

このなるほど世界の料理教室は、昭和六十年六月から十月まで、七回にわたり、吉島公民館主催で開催しました。趣旨は、地域の人々が世界の国々の料理実習を通じて、国際理解を深め国際親善に寄与することをねらったものです。家庭ではなじみのうすい他の国々の料理を学習することができ、しかも、食事をすることで多くの応募者がありました。十月で終了するところももう少し続けてほしいとの要望があり、グループとして活動することになりました。定例会は月一回第三土曜日の夜にすることで続いています。PRなどで公民館は協力しているものの、会の自主性は高くなっています。こうした積み重ねがあり、現在、十五か国、二十七回を開催しました。

国連寄託図書館開館

中央図書館

国連公式記録など多数

広島市立中央図書館内にこの程、「国連寄託図書館」が開館しました。

中央図書館では、既に昭和五十七年から国際資料室を設け、国際平和文化都市広島図書館とし平和教育や国際理解を推進していますが、この「国連寄託図書館」の開館に伴い、世界の平和と安全の維持などを旨とする国際連合とのホットラインが結ばれたこととなります。

「国連寄託図書館」とは、国

際連合がその活動状況を資料にまとめて、世界の人々に知らせるために世界各地へ設けているもので、日本国内では十二館指定されています。このうち公共図書館への指定は、当館が初めてであり、国際平和年であった昨年十二月に指定を受け、今年一月二十二日の開館よりサービスを開始しています。

国際連合から当館へ送られてくる資料には、国際連合の主要機関の会議等の会期終了後に作

成される公式記録（年間約千点）、国際連合事務局刊行の出版物（年間約二百五十点）、アジア太平洋経済社会委員会資料があり、国際連合の広範な活動を反映して政治、経済、社会等多岐にわたっています。いずれも資料は英文資料となっています。

また、昭和四十年七月から広島大学内に設けられていた国連寄託図書館の資料約三万点も譲り受け、この秋には本格的に活動を予定中です。

最後に国連ダグ・ハマーシヨルド図書館館長レンクベルド・ヒトロフ氏が国連寄託図書館の広島市への寄託・開館に寄せられた文章の一部を紹介します。

「国連憲章の前文は「われら連合国の人民は」という言葉で始

まっておりますが、これは国際連合の主体が、まさに世界の人々であることを宣言したものであります。国際連合が世界平和のためにどれだけ有効に機能出来るかは、世界の人々がどれ

だけ国際連合の活動を理解し、



国連寄託図書館開館式であいさつする 荒木広島市長

それによって世界平和の推進役としての国際連合に支持を寄せるといえる。国連寄託図書館は、この世界の人々に対して、国際連合の活動に関する基本的情報を提供する重要な役目を担っている……この言葉の趣旨に沿うよう活動していきたいと思っています。どうぞ「広島市国連寄託図書館」を大いに利用してください。

（奉仕地域）

中国・四国地方

（利用案内）

- 一、館内閲覧。
- 二、一人四冊、二週間の館外貸出。
- 三、資料複写（二枚四十円）

その他、直接来館しての利用が困難な方には、最寄りの公共

図書館などを通じて利用ができます。ただし、こちらは一人三冊以内で郵送に必要な日数を含み三十日間です。

（利用時間）

午前九時から午後七時まで
（土・日曜日は午後三時まで）

（休館日）

月曜日、八月六日、国民の祝日（月曜日にあたる）ときはその翌日、月末整理日（月曜日にあたる）ときはその翌日、年末年始（十二月二十八日から一月四日まで）、特別整理期間（九月及び十月中において十日）

× × ×
詳しいことは、広島市立中央図書館（千七三〇） 広島市中央区基町三番一号 電話 〇八二二二二一五五四（二）にお尋ねください。

広島ユネスコ協会 昭和六十一年度役員

- ◇名誉会長 荒木武
- ◇顧問 内海巖・沖原豊・岡田泰二
- ◇会長 河村盛明
- ◇副会長 信井正行・古川浩司・加藤朗一
- ◇常任理事 教育活動 本家正文・太鼓矢晋・水野文隆（組織活動）吉岡尊治・山崎克洋・伊東亮三
- ◇文化活動 佐藤普門・新川貞之・佐伯一幸
- ◇国際交

- 流）深崎敏之・二宮皓・永田龍男
- （広報活動）高橋昭博・亀井章・古田碩永
- ◇理事 藤井千之助・俣野仁一・溝上泰・藤原康子・定宗一
- 宏・北川建次・尾尻隆之・木山香寿美・斎藤清三・江川琢也・滝口節夫・末野忍・池田博重・藤井正一・山根繁徳・長迫凱郎・櫻原清・松岡盛人・北野明・田川清・瀬田洋
- ◇監事 松原博臣・増田昭二
- ◇事務局長 樋口宗彦
- ◇事務局長 山口道人